

軽井沢万平ホテル詩碑解題

萬山平處有斯亭 ばんざんしず ところ こ やど あ
萬山平かなる處 斯の亭有り

銷夏無人不孌婷 しょうか じょうてい ひと な
銷夏 孌婷ならざる人無く

衫影鬢香涼似水 さんえいかんこう すず みず に
衫影鬢香 涼しきこと水に似たり

白雲中響飯時鈴 はくうん うち ひび はんじ すず
白雲の中に響く飯時の鈴

巳酉八月爲萬平主人属 石埭老人

《大意》

万山しずかなるところこの宿あり
避暑の客はみな美しく淑やかで
夏姿に束髪が香って水のように涼しげ
霧のなかディナーベルの音が響きわたる

明治 42 [1909] 年 8 月、万平主人の依頼に応じて 石埭老人

《作者紹介》ながさかせきたい 永坂石埭 漢詩人・医師。弘化 2 [1845] 年 9 月 23 日、永坂周二（尾張藩医・狂歌師。1808-1867）の長男として名古屋に生まれる。名は周、あざな字は希莊、号は石埭。曼陀道人・玉池舫人・曼梅主人・夢楼斜庵とも号した。柴田しょうけい承桂（薬学者。1849-1910）は実弟。はじめ曾我耐軒（1816-1870）に、ついで永井かげん禾原（荷風の父。1852-1913）らとともに森しゅんとう春濤（1819-1889）と鷺津毅堂（1825-1882）について漢詩を学び、神波即山（1832-1891）・奥田香雨（1843-1874）・丹羽花南（1846-1878）とならんで「森門の四天王」と称された。また、尾張藩が招聘した清の詩人・金ひん邠（金嘉穂）にも学んだ。戊辰戦争に際し、藩兵として有栖川宮たるひと熾仁親王（征東大総督）の警衛隊に加わり江戸城に入る。公務のかたわら和泉橋医学校（東大医学部の前身）で学ぶ。明治 5 年、第一大学区医学校（東大医学部の前身）に入り、ドイツ人ホフマン（明治 4 年来日の御雇医師。Theodor Eduard Hoffmann, 1837-1894）に内科学を学ぶ。明治 7 年から 22 年まで、東京医学校（のち帝国大学医科大学。東大医学部の前身）に勤務。この間、神田お玉ヶ池の梁川せいがん星巖（尊攘派の漢詩人。森春濤の師。1789-1858）邸址に中国趣味を凝らした居を構え、玉池仙館と称する。明治 13 年、『横濱竹枝』を刊行。明治 22 年、大学を辞して開業。明治 23 年、長瀬商店が

石鯨の製造販売を始めるにあたって、石埭はこれを「花王石鯨」と命名し、効能書と題字を書く。明治35年、北里柴三郎らとともに、東洋諸国への近代医学の普及を目的とする東亜同文医会（のちの同仁会）に参加。明治44年、吉川弘文館（東京）および川瀬書店（名古屋）より『前赤壁賦』『後赤壁賦』（蘇軾）を刊行。大正6年、玉池仙館を松坂屋の伊藤家に譲って名古屋に帰り、松坂屋所有の残月庵に隠棲。大正13〔1924〕年8月24日80歳で歿するまで、全国からの揮毫依頼に応じた。詩風は「纖麗巧緻」と評され、書は「石埭流」と称された。また、南画は梅花を好んで描いた（この詩碑と対になっている梅花図も石埭の作品である）。さらに茶道にも通じ、客と快談することを喜んだ。なお、名古屋の蓬左文庫には『石埭翁詩稿』13巻が残されている。

なお、玉池仙館について、永井荷風は『下谷叢話』（1926年刊）のなかで次のように書いている。「星巖の去った後、玉池吟社の跡は化して何人の居となったのであろう。……嘉永五年に〔小野〕湖山がお玉ヶ池に居をトしたことがあるが、それは星巖の旧居より少しく隔った地蔵橋のほりであった。湖山の家はいくばくもなくして火災に罹り、その後江戸時代には再び詩人の来ってこの地にト居する者はなかった。世態一変して後明治七、八年の頃に至り名古屋藩の医にして詩を森春濤と鷺津毅堂とに学んだ永阪石埭が、星巖の邸址を探り求めて新に亭榭を築き、顔して玉池仙館と称した。其処は神田区松枝町二十三番地である。大正六年玉池仙館は主人石埭翁の名古屋に帰臥するに臨んで日本橋の富商某氏の有となり、大正十二年九月の大火に燬かれた。その翌年某月石埭翁もまた世を去った。庚を享ること八十歳という。」（岩波文庫版93頁）

また、石埭の甥にあたる柴田雄次（化学者。1882-1980）は、米寿記念の『歌稿詩稿』（1969年刊。私家版）のあとがきで次のように述べている。「このお玉ヶ池の家には純中国風の二室を設け、一つを祭詩龕と呼び、他を星舫と名づけていた。祭詩龕は石を組んだ床に中国から取り寄せた椅子や卓を並べ、一方の壁に龕をしつらえてここに中唐の高名詩人賈島の坐像が安置してあった。私は伯父がこの像をどこで手に入れたかを知らないが、高さ尺にも充たない頗る古びたものであったことを記憶している。今一つの星舫はやや晩年に増築した一室であったが、これはがらりと趣の変わったもので、庭の池に臨み欄があり畳敷きで天井は竹を編んで作り、凡て中国湖江に泛ぶ舟人の舫に擬したものであった。そして明治時代中国から文人が来朝すると屢々これを招いて詩筵を開くのが伯父の楽しみであったらしい。」「伯父はいずれ数百の遺吟があったに違いないが、遂に詩集というようなものを残さなかった。後人に批判されることはご免を蒙るという主意だと聞いたことがある。」

さらに、雄次の息子・柴田南雄（作曲家。1916-1996）の自伝『わが音楽わが人生』（1995年刊。岩波書店）にも、石埭に関する記事がある。「永坂周二の二人の息子のうち、祖父の承桂は次男だが、長男の永坂石埭は書家であり漢詩をつくり、絵も描いた風流人であった。明治時代に、薬屋の看板を頼まれて揮毫することが多く、わたくしは子供のころ、とくに関東大震災前に父に連れられて日本橋や神田あたりを歩くと、父が「これも永坂の伯父さんの看板だ」と立ち止まっては眺めていた。看板といっても、大きな一木に風格のある字

を彫り、色彩など施した立派なものが多かった。／しばらく前に東京で明治時代の看板の展示会があった時、石埭の字で「ウルユス」と彫った、漆塗りの縦長の見事な看板が出品されていた。父の言によるとこの菓の命名者は石埭本人で、どうせ菓なんか「空」みたいなものだからと、「空」の字を「ウルユ」と分解して尻尾に「ス」をつけておいた、と本人が語っていたそうだ〔引用者註：大槻文彦『大言海』の序文によれば「ウルユス」は腸内を「空^{むな}シウスル」下剤で、江戸時代からあったという〕。そういえば以前、軽井沢の万平ホテルの食堂の入口に、見事な櫨の一枚板に石埭老人の字と絵をびっしり彫り込んだのが据えてあるのを見たことがある。／扁額や掛軸はわが家にも伝わっていたが、額の一つに「芸^{うんこうくけい}香馥徑」と雄渾な四文字を大書したのがあった。この「芸」の字は藝の略字ではなく、別の字で、書物の葉にする香りのよい草（ヘンルーダ）の名だが、それが小道を匂わすというのは、「桃李言わざれども下自ずから蹊を成す」に、まあ近い意味であろう。この額は父親が子供のころからあったらしく、「芸香馥徑」を「うんこ拭け」と読んで、よく怒られたものだ、と言っていた。 (2001.9.5. 上村泰裕)

大正 13 年 8 月 26 日付「名古屋新聞」

(難読漢字をひらがなに改め、適宜句読点を加えた)

【石埭翁ついに逝く】

詩人にして書画をよくし殊にその書においてあまねく知られた名古屋市西区上長者町三、石埭永坂周二翁は、八十の老齢ながら矍鑠として雄渾の筆をふるい詩を楽しみつつ今日に至ったが、去る二十一日突如脳溢血にて倒れ爾来自宅で療養中のところ、ついに二十四日午後十一時永眠した。葬儀は来たる二十七日午後二時より東区小川町照遠寺において執行の由。

【何しろ八十歳の高齢ですからと令息は語る】

漢詩学の書道大家として知られている永坂石埭老の訃を聞いて二十五日夕刻、西区上長者町二丁目の宅を訪れると、生前老人が好みで作ったらしい数奇をこらした茶の間で、今は東京府下で医師を開業している令息の源一氏は語る。

父は二十日の朝、便所に行く時に足を踏みはずして縁から落ちました。それがため言語障害を起し脳溢血のため寝ていましたが、どうも経過が捗々しからず、二十四日の午後十一時ついに永眠しました。享年八十歳で弘化二年生まれ。宅には母（石埭老夫人）ふさが居るばかりです。十年ほどまえ隠居するつもりで名古屋に来ました。それからは好きな道であるところから漢詩などを書いて楽しみにしておったので、平生も大した丈夫のほうではありませんでしたが、それかといって寝るほどの病気をしたこともありません。何しろ八十歳の高齢ですから云々。

ちなみに同家にあった大正名家録による老人の略歴をあげると、

氏は愛知県の人。西区上畠町に生まれ、世々医師たり。名は周、字は希莊、石 埭と号す。別に曼陀道人、玉池舫人、曼梅主人の号あり。居を玉池仙梅と称す。幼にして穎語を初め家学を修め、十五歳、三河岡崎に赴き曾我耐軒の門に漢学詩文を学び、のち森春濤に師事し、つとに出藍の誉れあり。明治維新変乱起こるや有栖川大総督宮警衛隊藩兵として江戸城に入り、公務のかたわら和泉橋医学校に学ぶ。明治五年第一大医学部に入りドイツ人ホフマンについて内科の蘊奥を究め、七年医科大学に奉じて、二十二年辞して神田松枝町二十三番地に診察を開く。氏は大正医界の耆宿なると同時に、じつに現代漢詩界の巨擘たり。かつて医学部在学中、上野散策のとき戯れに「正是暮春春成帽尖仁宇夕陽明山中儿女能相誌咲指多情」と貸費生の一絶を作って校則にふれ禁足されたほどで、氏はすこぶる多趣味にて茶事、書道に堪能なるはあまねく世人の知るところで、書および篆刻もまた巧みである、と。